

▼平家物語の特徴

- ・源平の興亡を描く「」。
- ・「」が語り伝え、流麗な「」で書かれた。

▼さらに詳しく

成立は明確ではないが、琵琶法師が「」として語り伝えたもので、南北朝時代に活躍した琵琶法師の巨匠覚一によって応安四年（一三七一）に完成された。「」が一般にはよく知られている。異本が多く、大きく分けて、琵琶法師によって語られた「」系と、読み物としての「」系とがある。

内容の中心は、「」が太政大臣となった仁安二年（一一六七）から、壇の浦での「」の元暦二年（一一八五）までの約二〇年間である。「」を説く一文で筆を起し、平家繁栄の陰で泣く祇王・小督らの女性哀話、反平家の動きを見せる俊寛らの運命、以仁王の挙兵と敗退、平家を都から掃討しながら同族の頼朝に滅ぼされる「」、勇猛果敢な義経の合戦譚など、様々な逸話を七五調を基調とした流麗な「」で描く。覚一本では、我が子、安徳天皇を失った建礼門院の出家とその死で終わる。

古代の終焉と中世の始まりという転換期を告げる作品で、『太平記』など軍記物語はもちろんのこと、中世の謡曲や近世の浄瑠璃など、後代の文学に大きな影響を与えた。

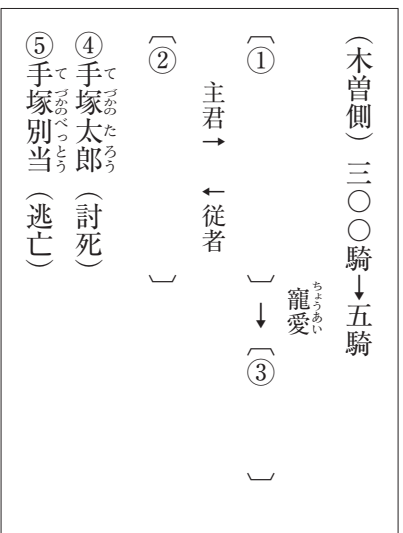
祇園精舎

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰のことわりをあらはす。

この冒頭文に見られるように、万物はすべて移り変わるといふ意の「」。「」と、栄えるものは必ず滅びるといふ意の「」。「」を掲げ、『平家物語』全編を貫く根本主題として「」を説く。さらに「おこれる人も久しからず、唯春の夜の夢のごとし。」と続き、平清盛をはじめとする平家一門の権勢と滅亡を内容の中心に据えていることが読み取れる。

木曾の最期

●人物関係図



追討

